

身体名を含む慣用句日英語比較

— 「腕」と arm を中心として —

木 原 美樹子

Ude and Arm: A Comparative Study of Body-Related Idioms in English and Japanese

Minako Kihara

(2015年11月27日受理)

1. はじめに

日本語と英語は違いの多い言語であるが、身体名を含む慣用句には、類似する表現が意外に多く存在する。言語が違って、人は同じ身体部位を持って活動しており、その共通性が言語表現に反映されているのである。日本語に「見て見ぬふりをする」の意味で「目をつぶる」という慣用句があり、英語でも“close one's eyes”と表現する。日本語で「うわさなどを聞きつけるのが早い」ことを「耳が早い」と言い、英語でも“have quick ears”と言う。他にも(1)のように、身体名を含む類似の慣用句が少なくない。

- (1) a. 「目が据わる」 one's eyes are fixed
- b. 「鼻で笑う」 laugh through one's nose
- c. 「耳を塞ぐ」 cover one's ears to
- d. 「胸が躍る」 one's heart leaps at

(1a)-(1d) の慣用句を用いた文 (2)-(5) は、それぞれ同様の意味を表している。

- (2) a. たくさん飲み過ぎて彼は目が据わっている。
- b. He has drunk too much, so his eyes are fixed.
- (3) a. 私がそのことを彼に話したら、鼻で笑って信用しなかった。
- b. When I said that to him, he laughed through his nose and didn't believe me.
- (4) a. 悲惨なニュースに思わず耳を塞いだ。
- b. I automatically covered my ears to the tragic news.

- (5) a. 素晴らしいニュースに胸が躍った。

- b. My heart leaped at the fantastic news.

(『身体名イディオム和英辞典』)

同様の意味を表すが、使われている身体名が異なる(6)(7)のような慣用句の例もある。

- (6) a. 彼女は口は悪いが根は優しい人だ。

- b. She has a sharp tongue but is kind at heart.

- (7) a. 私は人に顎で使われたくはない。

- b. I don't like to be led by the nose.

(6a) の「口が悪い」は「人や物事をずけずけとけなすような話し方をする」(『デジタル大辞泉』)という意味で、日本語では「口」が用いられているが、同様の意味の英語では(6b)のように“have a sharp tongue”で tongue が用いられている。(7a) の「顎で使う」は「高慢な態度で、意のままに人を使う」(『デジタル大辞泉』)という意味で、日本語では「顎」が用いられているが、同様の意味の英語では(7b)のように“lead by the nose”で nose が用いられている。文化的な違いが、慣用表現の違いに表れていると考えられる。

日本語の「腕」を含む慣用句は、(8)のように「能力・技術」に関わるものが多い。¹

- (8) 腕が上がる, 腕がいい, 腕が立つ, 腕が鳴る,
腕に覚えがある, 腕に縋りをかける, 腕を振るう,
腕を磨く

それに対して、英語の arm を含む慣用句は多様であるが、「能力・技術」に関わるものは見られない。

本稿では、日本語の「腕」と英語の arm を含む慣用句を比較し、日英語の相違とその理由について考察す

別刷請求先：木原美樹子，中村学園大学教育学部，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail : kihara@nakamura-u.ac.jp

¹ 沖監修 (2004) 「日本語の身体慣用句一覧」には、「腕」を含む慣用句が17点掲載されている。この一覧には、『日本国語大辞典第二版』(全13巻)より、現代日本語として使用または理解されている、身体名を含む慣用句が語釈とともに挙げられている。「腕」を含む慣用句は「能力・技術」に関わるものが15点と「腕が後ろへ回る」(罪を犯して検挙される)、「腕を組む」(一つの目標に向かって団結する)の2点である。後者2点に比べて「手が後ろへ回る」「手を組む」の方が圧倒的に使用されていると思われる。

る。日英語の相違がどのようなところから生じているかについて、語源的、文化的な観点から検討する。これまでの慣用句研究において、庄司（2010）は、日本語と英語の慣用句の共通性について認知言語学的な立場からの説明を試みているが、「腕」と arm の議論に不備がある。「腕」と arm を含む慣用句について取り上げるにあたって、意味的に近い「手」や hand を含む慣用句についても併せて検討する。何を「慣用句」とするかについては、時代や研究者により異なる²が、ここでは、(9)の宮地（1982）の定義のように捉えることとする。³

- (9) 単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉である。

2. 「手」「腕」と hand, arm

日本語の「手」と「腕」は、『広辞苑』によるとそれぞれ(10)(11)のような身体部位を表す。

- (10) 肩から指先に至る間の総称。手首から先の部分。手のひら。手の指。

(11) ひじと手首の間。肩口から手首までの部分。⁴
「手」は腕のつけ根から指先までの総称として「腕」を含むが、「腕」が指示しない手首から先の部分だけを指すこともある。「手」「腕」に対する英語としては、それぞれ hand, arm が当てられるが、指示する身体部位にずれがある。hand と arm はそれぞれ『オックスフォード新英英辞典』（以下 ODE）で(12)(13)のように定義されている。

- (12) the end part of a person's arm beyond the wrist, including the palm, fingers, and thumb
(13) each of the two upper limbs of the human body from the shoulder to the hand

hand は手のひらと指を含む手首から先の部分で、arm は肩から hand まで、人間の体の上肢（upper limb）であると示されている。日本語の「手」と英語の hand の違いについて、『新英和大辞典』では、(14)のように説明されている。

- (14) 日本語の「手」は足に対していうときは腕のつけ根から指先までを指すが、英語の hand は手首から先の部分である。手首から肩の部分までは arm という。ただし arm はときに hand も含めて意味することがある。

「手」は時に「腕」を含むが、hand は arm を含まない。arm は hand を含むことがある。日本語では「手」と「足」をまとめて「手足」と表現し、「腕足」とは言わない。英語では“limbs”, “hands and feet” や “arms and legs” と表す。また “hand and foot” という表現が「手足となって」という意味で、(15)のように用いられる。

- (15) a. She served her husband hand and foot.
(彼女はまめまめしく夫に仕えた。)
b. Don't think I'm going to wait on you hand and foot!
(私が何から何まであなたの世話をすると
思わないでくれ。)

(『新英和大辞典』)

手首から先を指す hand と「足首から下」を指す foot, 肩から手首までを指す arm と「ものの付け根から下、特に足首までの部分」（『新英和大辞典』）を指す leg が対になる。「法外な金がかかる」「法外な金を請求する」ことを表す英語の慣用句として、それぞれ “cost a person an arm and a leg” “charge a person an arm and a leg” があり、(16)のように用いられる。

- (16) a. This watch cost me an arm and a leg.
(この腕時計は目が飛び出るほど高かった。)
b. That restaurant charges an arm and a leg.
(あのレストランはべらぼうな金をとる。)
(『英和イディオム完全対訳辞典』)

これらの表現は、an arm and a leg が非常に価値のあるものとして捉えられていることを示している。

語源的に hand は「つかむもの」が原義であり、arm は「肩とつなぎ合うもの」が原義である（『ジーニアス英和大辞典』）。辞書の見出しとしては「腕」の意味の arm¹と「武器」の意味の arm²がある。後者は語源的には「武器、家具」を意味するラテン語 arma から来しているとされ、arm¹と区別されている。しかしながら、「腕」の arm¹と「武器」の arm²それぞれの語源 (e)arm と arma の元を辿れば、どちらも “fit, join” を意味する印欧祖語の語根 ar- とつながっている（Online Etymology Dictionary）。英語ネイティブ・スピーカーは、arm¹と arm²を別の単語として認識はしているが、2つの語に強いつながりを感じているようである。arm¹は音が同じであることにより、arm²が持つ意味の連想が働いているのではないかと思われる。“twist a person's arm” は、「人の腕をねじ上げる」ことで人の力

² 宮地（1982）；靱山（1997）；石田（2014）参照

³ 靱山（1997）は「目が高い」「手が足りない」のような表現は、句全体の意味が個々の構成語の意味の積み重ねから理解できると考えられるため、慣用句としない立場をとっている。本稿は、慣用句の定義・分類を目的としておらず、(9)のように大きく捉える。

⁴ 古くは肩からひじまでを「かいな」と言い、ひじから手首を「うで」と言った。

の源である腕を封じ込め比喩的に「人に無理強いする」という意味を表す。⁵ “the (long) arm of the law” (法の力, 警察の捜査力) は権力を示す表現であり, “put the arm on someone” (強要する) のような表現もある。(17) はその例である。

- (17) If they don't cooperate, put the arm on them.
(協力しないようだったら, 力づくでもやらせろ.)
(『ランダムハウス英和大辞典』)

arm が強い力を持つことによる比喩表現である。arm¹ は同音の arm² による連想から, 日本語の「腕」に比べて「力」のイメージを強く持っていると考えられる。⁶

3. 「腕」と arm を含む慣用句

日本語の「腕」を用いた慣用句は, (8) に挙げた「腕が上がる」「腕がいい」「腕が立つ」「腕が鳴る」「腕に覚えがある」「腕に縫いをかける」「腕を振るう」「腕を磨く」のように, 「能力・技術」に関わる表現が圧倒的に多い。しかしそれらを英語では, arm を使って表現しない。

- (18) a. どうすればテニスの腕が上がるでしょうか。
b. How do I get better at playing tennis?
(19) a. あの木工はすごく腕がいい。
b. That carpenter is very skillful.
(20) a. 腕が立つ職人の数が減って来ている。
b. The number of skillful craftsmen has been decreasing.
(21) a. 腕が鳴るよ。
b. I'm itching to do it.
(22) a. 彼は会社の経営に腕を振るった。
b. He showed his ability in managing the company.
(23) a. 彼女はパリで料理の腕を磨きたいと思っている。
b. She wants to develop her cooking skills in Paris.

(『身体名イディオム英和辞典』)

「能力・技術」に関する表現はないが, 英語の arm を含む慣用句は多様である。(24)-(25) は長さや距離感を腕の長さに例えた表現 “as long as one's arm” や “at arm's

length” を用いた例である。

- (24) Lucy gave him a shopping list as long as her arm.

(ルーシーは長々しい買い物メモを彼に渡した。)
(『英語イディオム・句動詞大辞典』)

- (25) a. He held the dirty rag at arm's length.
(ODE)

b. He's the kind of person you pity but want to keep at arm's length.
(気の毒には思っても近寄りたくはない人だ。)

(『ランダムハウス英和大辞典』)

- c. Relations between the bank and the committee will be at arm's length until the report is delivered in July.

(Cobuild Idiom Dictionary)

“as long as one's arm” は物の長さが長いことを, 腕の長さに例えて比喩的に表現している。(24) では買い物メモがとても長いものであることを示し, (25) は2者間の距離感を表現している。(25a) について ODE では “= as far away from his body as possible” と付記されている。字義的には「腕の長さ分, 離して持った」という表現であるが, できるだけ遠ざけて持っていたことを表している。同様に (25b) も (25c) も, 字義的には「腕の長さ離れた状態にする」ということだが, 「距離をおく」ことを示している。⁷ (25) のように “at arm's length” というのは, 「(人・物事から) (腕一杯伸ばした分だけ) 離れて」(『ロングマンイディオム英和辞典』) ということから, 幾らか距離をおくことを表し, 物理的であれ比喩的であれ, 「近い」という感覚はないようである。次のような例もある。

- (26) He had lived his twenty-eight years at arm's length from violence, but ...

(彼は生れてからの28年間を暴力とは無縁で生きてきた, が…)⁸

(『ロングマンイディオム英和辞典』)

(26) で “at arm's length from violence” という部分の日本語訳は, 「暴力とは無縁で」となっている。「暴力から腕の長さ分離れている」ことが「全く関わりがない」になるのである。

⁵ arm-twist (圧力をかける) や arm-twisting (無理押し, 強い圧力) という表現もある。arm-twist は (i) のように用いられる。

(i) White House staffers arm-twisted the coal industry into accepting the contract. ホワイトハウスの幹部たちは, 石炭産業界にその契約を押しつけ受諾させた。(『英語イディオム事典<身体句編>』)

⁶ 「腕」にも「腕力 (に訴える)」「腕づく」といった「力」を表す表現があるが, どれも暴力的なイメージを持つように思われる。

⁷ 実際に距離を置くときは hold を, 比喩的な場合は keep を用いるのが普通 (『ロングマンイディオム英和辞典』) というのである。

⁸ (26) は, Evelyn Waugh の作品『愛されたもの』(The Loved One) からの引用である。主人公デニスの年齢設定が28歳であるため, 「生れてからの」という部分が補足的に挿入された日本語訳となっている。

他にも, arm を含む慣用句には, “with folded arms” (手をこまねいて), “with one arm (tied) behind one’s back” (不利な条件で; 何の苦労もなく), “with open arms” (心から喜んで) があり, (27) のように使われる。

(27) a. He looked on with folded arms.

(彼は手をこまねいて傍観していた。)

(『英語イディオム・句動詞大辞典』)

b. I can assemble that chair with one arm tied behind my back.

(あのいすは簡単に組み立てられる。)

(『オーレックス英和辞典』)

c. We welcomed their offer with open arms.

(彼らの申し出に諸手を上げて賛成した。)

(『英語イディオム・句動詞大辞典』)

(27a) では「腕を組む」ことが, 手を出さずにいる状態であり「傍観する」につながる。(27b) は人が後ろ手に縛られることから, 何もできない状態, 「不利な条件」になるが, その状態でもできる行為に言及すれば, その行為が簡単にできることを表現することになる。(27c) は腕を広げる動作から「歓迎」の意味を表している。(27) では arm を用いた動作を表す慣用句が, 比喩的な意味で使われている。

庄司 (2010) は日本語と英語のイディオムを認知言語学的な立場で比較分析し, 「語の意味拡張やイディオム解釈にイメージ・スキーマが重要な役割を果たしている」と言う。そして「腕」が「技量・能力」のスキーマを持ち, イディオム全体の意味の動機付けとなっているのと同様のことが arm にも言えるとして, (28) の例を挙げている。

(28) The doctor decided to *chance his arm* and try to write a book on medicine.

(医者は冒険ではあるが医学書を書いてみようと思心した。)

(『ロングマンイディオム英和辞典』)

庄司 (2010: 181) は *chance* という動詞が「～を運任せにやってみる」という意味であり, *chance one’s arm* は「身体部位の腕 (の力) を試してみる」ということになっているとしている。arm は「腕の力」より抽象的な「技量・能力」を表し, 日本語の「腕試し」と同様であると言うのである。庄司 (2010) は, 言語が違って人間が持つ身体は同じという共通性に捉われ, 最初から arm には「腕」と同様のイメージ・スキーマが働いていると考えている。しかし, この *chance one’s arm* の表現は「技量・能力」を試すということではない。一本の腕を失うぐらいの危険を冒して, 何かに挑戦することである。『オックスフォードイディオム辞典』によると, “take a risk (especially when you are unlikely

to succeed)” ということである。成功する見込みはないが, 運に任せて思い切ってやるということである。身体の非常に大事な部分である「一本の腕」を賭けるぐらいの気持ちで何かをするということで, (29) も (28) と同様である。

(29) a. I’ll *chance my arm*, and offer £10 for the horse.

(思い切って運試しにその馬に10ポンド出そう。)

(『英語イディオム・句動詞大辞典』)

b. ‘I’m rather surprised you did decline, you know,’ said Charles. ‘You’ve *chanced your arm* so many times, haven’t you?’

(「きみがことわったのはいささかおどろいているよ」チャールズはそう言った。「きみはさんざん一か八かの冒険をやって来たんだらう。そうじゃないかね」)

(『英語イディオム事典<身体句編>』)

庄司 (2010: 182) は (30) の例が「技量・能力のスキーマ」に合わないことから, 「スキーマとは違う誇張的な意味で使われることもある」と説明している。

(30) That new car must have *cost (him) an arm and a leg*.

(『ロングマンイディオム英和辞典』)

しかしながら (30) を特別扱いする必要はないと思われる。(28) や (29) と同様, (30) も arm が非常に大切なものとして捉えられているということである。(30) は「片腕と片足が必要なくらい」多額のお金がかかるということである。“give one’s right arm” を用いた (31) の例も同様である。

(31) Most people would give their right arm to have a job like yours.

(たいがいの人はきみのような仕事につけるんだったら何だってするよ。)

(『英和イディオム完全対訳辞典』)

「実現が難しいことや入手しがたいもの」に対する願望を表す表現である。「右腕をやる」ほどの大きな犠牲を厭わないぐらい実現させたい・手に入れたいというのである。

4. 「手」と hand を含む慣用句

(32)-(43) は, 「手」を含む慣用句を使った文で, それぞれ英語にしたとき hand を含む表現が可能な例である。

((32)-(43) の出典はすべて『身体名イディオム和英辞典』)

- (32) a. 手が空いたら手伝って。
b. When you have your hands free, please help me.
- (33) a. この活動には、より多くのボランティアの手が要る。
b. This activity needs more volunteers' hands.
- (34) a. 手が足りないので、今週シフトを増やしてくれないか。
b. Can you do any extra shifts this week as we are short of hands?
- (35) a. 彼は怒ると手がつけられなくなる。
b. He gets out of hand when he is upset.
- (36) a. あいにく手が塞がっています。
b. I'm sorry, but I have my hands full.
- (37) a. 私たちはプレゼンを成功させるために手に手を取って協力した。
b. We went hand in hand together to make a winning presentation.
- (38) a. 彼の故人データは犯罪組織の手に渡った。
b. His personal data fell into the hands of a crime organization.
- (39) a. 父は私に決して手を上げなかった。
b. My father never raised his hand against me.
- (40) a. この大変な時代にはお互いに手を貸すことが必要だ。
b. It's necessary to lend a hand to one another at this difficult time.
- (41) a. 私たちは外国の会社と手を組むことで危機を乗り越えた。
b. We co-uld over come the crisis by joining hands with a foreign company.
- (42) a. 彼は常に何か新しいことに手を付けたがる。
b. He always wants to set his hand to something new.
- (43) a. 子どもたちはまだ私の手を離れていない。
b. My children are not yet off my hands.

以上の例は、日本語と英語で表現の仕方が同じであるかかなり近いと言える。前節で述べたように、arm を用いた慣用句の意味は多様であるが、「能力・技術」を表す表現は見られない。hand には (44) のように、日本語の「腕」に見られるような「能力・技術」を表す表現がある。

- (44) a. "I've always wanted to try my hand at unraveling a murder mystery."
(「殺人事件の解決に腕を試してみたいといつも願っていたんだ」)
b. 'I've only been practicing so far. Getting my hand in so to speak.'
(それまで練習してただけだ。いわばうでを上げるのにさ。)
c. She has a hand for pastry.
(パイを作るのがうまい。)
d. He had a good hand in teaching.
(教え方が上手だ。)
e. He has a light hand with cooking.
(彼は料理が上手だ。)
f. This painting shows a master's hand.
(この絵は巨匠の技量を示している。)
g. She plays the piano once or twice a week to keep her hand in.
(彼女は腕が鈍らないように週に1, 2度ピアノを弾いている。)
((44a)-(44b)『英語イディオム事典<身体句編>』, (44c)-(44d)『新英和大辞典』, (44e)-(44g)『オーレックス英和辞典』)

日本語の「手」を含む慣用句で「能力・技術」に関わるものとして、どの国語辞典にも「手が上がる」が挙げられている。「料理の手が上がる」「書道の手が上がる」などの用例があるが、実際には「腕が上がる」が使われることが多い。他にも「手に余る」や「手に負えない」があるが、「自分の力では処理できない」ことを表し、「腕」を含む慣用句にはない意味を表している。

5. 結 び

日本語と英語の身体名を含む慣用句の中で、主に「腕」と arm, 合わせて「手」と hand を含む慣用句を取り上げ、それらの共通点と相違点について見てきた。日本語と英語で、同じ身体名を含み表現の仕方や意味が類似する慣用句も少なくない。同様の意味だが使われている身体名が異なる慣用句もある。「腕」を含む慣用句はほとんどが「能力・技術」を表すものであるが、arm はそのような意味を表す表現がなく、hand にはあることを見た。日本語の「手」については「手が上がる」のような表現が「能力・技術」を表すものとして挙げられるが、「腕が上がる」に比べて使用も限られている。「手が上がる」の字義通りの意味が強いことも関係していると思われる。

arm には、「武器」の意味がある。それから連想され

る「力」のイメージが、「腕」を意味する arm に影響していることが考えられる。arm を含む慣用句には “twist a person's arm” (人に無理強いする), “the (long) arm of the law” (法の力, 警察の捜査力), “put the arm on someone” (強要する) のような表現があり, arm は日本語の「腕」よりも「力」のイメージが強いと思われる。

日本語には「小手先」という表現がある。『デジタル大辞泉』では以下のように定義されている。

- (45) 1. 手の先の方。手先。
2. ちょっとした機転。小才 (こさい)。
3. その場しのぎで、将来を見通した深い考えのないこと。

ゴルフやテニスなどで「小手先で打つな、腕を振れ」と言われる。「小手先」という言葉には、単に (45-1) の「手の先の方」という身体部位の意味だけでなく、「手先でごまかす」というネガティブなイメージがある。それが「小手先」の定義 (45-3) に表れている。「手打ち」ではなく「体の回転を使って打て」「腰で打て」とも言われる。「手先」ではなく「腕」さらには「腰」が大切という考えが、日本人には強いように思われる。

剣持 (1988) は、島崎藤村が作品中で述べた日本文化の「腰骨の強さ」に言及することから始め、西洋文化は「肩」の文化、日本文化は「腰」の文化であると論じている。「肩」の文化を反映するオリンピック種目に対して、「腰」を重視する日本文化を、日本の武道を例に挙げて説明している。剣道では肩の力を抜いて腰に力を入れる。安田武の『型の日本文化』から、安田が剣道の師から教えられたという次の一節を引用している。

- (46) 相手を打込むのは腰である。竹刀を持った手でも、また足でもない。まず腰から前に出る、手も足もそれに従うのだ。

(安田武 1984: 45)

剣持は (1988: 21-23) は、柔道についても「肩に力を入れて上から押さえつけるような組み方では腰がふらついてしまう」こと、弓道についても「腕の力でなく腰の力で弓を引く」ことを指摘している。相撲においても同様、腰が非常に重要とされる。武道に限らず、日本では野球においても、「小手先で打つな、腰を入れろ」などと言われる。上半身、腕の力にまかせて打つことをよしとしない文化がある。以上のような文化的違いも、本稿で取り上げた身体名を含む慣用表現に影響しているのではないと思われる。

参考文献

石田ブリシラ (2014) 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』

開拓社。

沖裕子編 (2004) 「日本語の身体慣用句一覧」『信大日本語教育研究』4, 33-85.

剣持武彦 (1988) 『肩の文化、腰の文化』双文社出版。

庄司明子 (2010) 「日英語イディオムの認知的研究」東北大学博士論文。

宮地裕 (1982) 「慣用句解説」『慣用句の意味と用法』宮地裕編, 237-265. 明治書院。

舩山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』第80号, 29-43.

Numberg, G., I. A. Sag and T. Wasow (1994) “Idioms,” *Language* 70: 3, 491-538.

安田武 (1984) 『型の日本文化』朝日新聞社。

辞書・辞典

『英語イディオム・句動詞大辞典』(2011) 三省堂。

『英語イディオム事典<身体句編>』多田幸蔵 (1981) 大修館書店。

『英和イディオム完全対訳辞典』ジャン・マケーレブ 岩垣守彦編著 (2003) 朝日出版社。

『オーレックス英和辞典』(2008) 電子辞書版 旺文社。

『オックスフォードイディオム辞典』(*Oxford Idioms Dictionary for Learners of English*) 2nd ed. (2006) 電子辞書版 Oxford University Press.

『オックスフォード新英英辞典』(*Oxford Dictionary of English*) 2nd ed. Revised (2005) 電子辞書版 Oxford University Press.

『からだことば辞典』東郷吉男編 (2003) 東京堂出版。

『広辞苑』第六版 (2011) 電子辞書版 岩波書店。

『ジーニアス英和大辞典』第3版 (2011) 電子辞書版 大修館書店。

『新英和大辞典』第6版 (2011) 電子辞書版 研究社。

『身体名イディオム和英辞典』木原美樹子他編著 (2014) 英光社。

『デジタル大辞泉』小学館 (<https://kotobank.jp>, 2015年8月26日)

『日本語表現・文型事典』小池清治他編 (2002) 朝倉書店。

『ランダムハウス英和大辞典』第2版 (1987) 電子辞書版 小学館。

『ロングマンイディオム英和辞典』(2003) 研究社。

Cobuild Idiom Dictionary, 3rd Revised ed. (2012) Collins Cobuild.

Online Etymology Dictionary (www.etymonline.com, 2015年8月26日)